

# 内容節を含む名詞述語文「～のがNだ」と「～ことがNだ」

佐藤 雄一

## 1. はじめに

「特徴」のようなコト性を有する名詞<sup>1</sup>は、(1)のように「特徴は～ことだ」<sup>2</sup>という倒置指定文を作ることができる<sup>3</sup>。また、(1)の主語と述語を入れ替えて(2)のように「～ことが特徴だ」という指定文を作ることにもできる。さらに、(3)のように「～のが特徴だ」という文も可能である。

(1) この議論の特徴は、すべてのメディアを対等に論じていることである。

(LBa3\_00036)<sup>4</sup>

(2) すべてのメディアを対等に論じていることが、この議論の特徴である。

(3) この石けんは水に溶けやすく、起泡性（泡立ち）がよいのが特徴です。

(LBo5\_00015)

一方で、コト性を有する名詞であっても、(4)のようにコトダ文を作ることが難しいものもある。

(4) ?彼女の流儀は、おいしいものを吟味して少量食べることだ。

コトダ文にすると不自然な名詞であっても、(5)のように「～のがNだ」という形式の文は成り立つ。

(5) おいしいものを吟味して少量食べるのが彼女の流儀だ。(PM41\_00599)

本稿では、内容節を含む名詞述語文「～のがNだ」と「～ことがNだ」の表現上の相違点を明らかにしつつ、名詞述語文としての位置づけの相違について考察する。

## 2. 「の」と「こと」

名詞節を作る「の」と「こと」については、これまで多くの研究がなされており、「の」「こと」を伴った名詞節を受ける述語の性質によってどちらか一方しか使えない場合があるというのが定説となっている。

久野(1973)は、コトが「抽象化された概念を表す」のに対して、ノは「五感によって直接体験される具体的動作、状態、出来事を表す」(p.140)としている。

また、佐治(1993)は、「の」「こと」に関する従来の研究をふまえた上で、「の」は「節の事態を現場のありさま、動きのままとらえ」るのに対して、「こと」は「現場から離れて、

一つのまとまった事柄としてとらえる」と述べている (p.9)。

さらに、以下の例を挙げ<sup>5</sup>、

(6) 花子さんがピアノをひいているのを聴く (描く)

(7) 花子さんがピアノをひいていること聞く (書く)

前者が現場の音や動きをとらえているのに対して、後者は現場からはなれて、ことばとしてまとめられた事柄を対象としていると述べ、「の」は事態をそのまま、何の意味も付け加えずに体言化するのに対し、「こと」は事態を事柄としてまとめて体言化するという役割分担がなされていると指摘している (p.9)。

また、

(8) 花子さんがキャバレーで、ピアノをひくの (こと) を止めた。

という例を挙げ、節の表す事態をまとまった一つの事柄としても、現場の中の動きとしてもとらえられる述語の場合は、「の」「こと」のどちらもとることができるとしている (p.9)。

「の」と「こと」の上記のような相違は、名詞節を受ける述語 (主として動詞) の性質に基づいて分析されたものであるが、名詞述語文にも適用することが可能であろう。

次節以降で、「の」と「こと」のとらえ方の違いを、名詞述語文で確認する。

### 3. 「～のがNだ」と「～ことがNだ」

佐藤 (2023) では、「～のがNだ」の述語名詞となるコト性名詞について、語彙的な意味が類似しているものを便宜的に分類して考察を行った。本稿でも、1) 「状況・状態」類、2) 「意見・考え」類、3) 「夢・希望」類、4) 「やり方」類、5) 「常識・マナー」類、6) 「習慣」類、7) 「仕事・役割」類、8) 「目的・理由」類、9) 「特徴・性質」類の9種類に分けて考察することにする。

以下の1)～9) に挙げられている名詞は、いずれも「～のがNだ」という形式で内容節を主語とした名詞述語文を構成することができるものである。

#### 1) 「状況・状態」類

「現状」、「現実」、「実状」、「実情」、「状況」、「実態」、「事実」、「真相」などは「～のがNだ」の「N」になりうる。しかし、これらの名詞は「こと」を伴う名詞節を主語として「～ことがNだ」とすると、許容度が下がる。BCCWJには、少数ではあるが、以下のような例が見られるが、いずれも不自然さは否めない。「～ことがNだ」が不自然である (従って用例も少ない) ため、これらの名詞を主語としたコトダ文の用例も見られない。

(9) 多くの子犬たちは深く血液のことを考えずにブリーディングされていることが現状なのです。(PM11\_00528)

(10) また産業もだんだんなくなっていく、農業も栄えない、漁業もだめだということが現実だと私は思っておりますから、～ (OM34\_00001)

- (11) 名神の建設に全部つぎ込んでも、ほかに一切やらなくても十何年かかかるという大変な計画であったということが当時の状況でございました。(OM61\_00010)
- (12) 結局先生今おっしゃったみたいに、どうやら三カ月前の予想が相当狂いつつあるということが実態だと思うんですね。(OM44\_00001)
- (13) 今日までの戦争は多くは自衛権の名に依って戦争を始められたと云うことが過去における事実であります。(PB23\_00637)

これらの名詞の内容は、どのような事態であるかをそのまま表現する必要があり、一つのまとまった事柄として表現することは難しいため「こと」が選択されることは極めて稀であり、一般的には「の」が選択されると解釈できる。

## 2) 「意見・考え」類

「意見」、「感想」、「本音」、「主張」、「見解」、「持論」、「言い分」などもコト性を有し、内容節を主語とした名詞述語文「～のがNだ」を作ることができる。これらは、名詞の性質上「という」を介在して「～というのがNだ」の形をとる。これらの名詞についても「こと」を伴う名詞節を主語として「～ことがNだ」とすると、かなり許容度が下がる。BCCWJには、少数ではあるが、以下のような例が見られるが、いずれも不自然さは否めない。「～ことがNだ」が不自然であるため、これらの名詞を主語としたコトダ文の用例も見られない。

- (14) 直接的な支援よりも、むしろ「ことを起こそうとする野心」を持つ人を育てることである、ということが研究会の一致した意見であった。(PB16\_00026)
- (15) 多様な要因を考慮した上で試算をしないと、こういうふうにはなかなかならないんじゃないんですかということが私の感想ですけれども、(OM61\_00010)
- (16) 安全管理は、「性悪説」と「荒れ模様」の現実主義の立場を取ることが本音である。(PB46\_00069)

佐治(1993)が述べるように「の」は節の事態を現場のありさま、動きのままとらえることから、1)「状況・状態」類に含まれる名詞や、2)「意見・考え」類に含まれる思考性や発話性をもつ名詞が述語になる場合は、「こと」ではなく、「の」が用いられるということになる。

## 3) 「夢・希望」類

「夢」、「理想」、「望み」、「希望」などは「～のがNだ」の「N」にもなりうるし、コトダ文の主語にもなりうる。これらの名詞は、「こと」を伴う名詞節を主語として「～ことがNだ」という文も作ることができる。

- (17) それ以来ずっとキャビンアテンダントになることが夢でした。(OP98\_00002)
- (18) 受験は、子どもたちが持っている本当の基礎的学力で優劣を決めることが理想です。(PB43\_00623)
- (19) この本を薦監督ご自身に読んでいただくことが、私の望みだったからである。

(PB17\_00027)

(20) お風呂の窓を全開にして入浴できることが奥さまの希望でした。(PM41\_01329)

これらの名詞は、佐治 (1993) に従えば、節の表す事態を全体でまとまった一つの事柄としても、現場の中の動きとしてもとらえることのできる名詞ということになる。

「夢」は「の」でも「こと」でも表現の相違はほとんどないように思われるが、「こと」のほうが「一つのまとまった事柄として」「抽象化」されており、「の」のほうが「具体的動作、状態、出来事」を表しているようなニュアンスは受け取れる。

(21) それ以来ずっとキャビンアテンダントになることが夢でした。(OP98\_00002)

(22) 外国で日本語を教える先生になるのが夢です。(PM31\_00264)

「理想」についても同様のことが言える。

(23) フォントは、それぞれの文字の形に合わせて、すべてのデータを揃えることが理想です。(OB5X\_00301)

(24) コンクリートは練り混ぜてから二時間以内に打ち込むのが理想だ。(LBi3\_00024)

(23) は「ひとつのまとまった事柄」としてとらえられるのに対し、(24) は「現場の中の動き」としてとらえられやすいため「こと」よりも「の」が選択されているという解釈ができる。

「望み」については、「唯一の」「第一の」のように、一つのまとまった事柄としてとらえる場合は、「～ことが」が用いられる。「という」を介在させる場合は「の」が用いられる。

(25) 餌を求めて子孫を残すことが唯一の望みだった。(LBm9\_00109)

(26) きみと結婚することがぼくの一番の望みなんだよ。(LBj9\_00070)

(27) 家族四人が将来、日本で暮らせたらどんなにいいだろうというのが曾我さんの望みだ。(PN4k\_00014)

(28) 自分の手で新しい職域代表議員をつくるというのが、臼田の大きな望みだった。(PB53\_00240)

(27) は「という」を介在させることで、内容節にモダリティを取り込むことが可能になるため、「望み」の内容をより主観的に表現することができる。(28) も単なる事柄というよりも意思の表明というニュアンスも含んでいるように解釈できる。

#### 4) 「やり方」類

「流儀」、「スタイル」、「順序」、「食べ方」、「方法」、「戦略」、「やり方」、「流れ」などがこの類に含まれる。BCCWJに見られた「～ことがNだ」の用例は「順序」2例、「戦略」3例、「やり方」3例のみであった。

(29) その原因を発見する為には、何と言っても事実をもっと多く、集めて見ることが順序である。(LBa4\_00009)

(30) 行政と住民との協働の取り組みを進めることが最良の戦略であると考えます。(OP03\_00001)

(31) 昔の美しいデザインをそのまま生かしながら後世に建築を伝えていくことが、この近江八幡のやり方らしい。(OY13\_02052)

(29) の「順序」の例は、やや許容度が低いように思われる。(30) の「戦略」の用例に関しては「最良の」という修飾語で限定されていることが「こと」による名詞化を許容する要因となっていると考えられる。

「やり方」類に含まれる名詞は、その性質上、内容節はまとまりのある事柄として表現するのではなく、手順なり、方法なりを具体的な動きのまま表現するため「こと」ではなく「の」が選択されやすいと考えられる。

## 5) 「常識・マナー」類

「常識」、「マナー」、「原則」、「義務」、「礼儀」、「しきたり」、「エチケット」、「心得」などがこの類に含まれる。用例数の多寡はあるが、いずれも「～ことがNだ」の例が見られる。佐藤 (2023) で指摘されているように、この類の名詞はコトダ文にはなりにくい傾向があるが、それとは対照的に「～ことがNだ」の用例数は一定数見られる。

(32) 嘗ては、学校を卒業すれば働くものだということが常識だったので、～(OY01\_01306)

(33) フリーマーケットでは、値切ることが常識であり、店側も値切られることを前提に値段をつけている。(PB33\_00267)

(34) 市場調査の結果では、ニュースは金にならないというのが常識であった。(LBg2\_00044)

(35) 学校を出ると、就職をするのが常識でした。(LBs3\_00066)

まとまった事柄として表現するか、動きとして表現するか、「常識」はどちらの表現も可能な名詞ということになる。

(36) 育児休業終了後は、従前と勤務や勤務条件に変更なく職場復帰することが原則です。(LBo3\_00117)

(37) 債務を負っていた人が死亡すれば、その債務は相続人に移るのが原則なのです。(LBo3\_00100)

「原則」については「～ことが原則だ」の用例数が46例あるのに対して、「～のが原則だ」の用例数は210例と圧倒的に多い。

一つのまとまった事柄としてとらえられにくい要因がありそうであるが、ここではこれ以上立ち入らないことにする。

(38) 旅行中、I L Oへ一ヵ月に一回レポートを出すことが義務だった。(PB12\_00020)

(39) でも、贈り物って、使わず飾るんじゃなくて、実際に使ってあげることが、贈り主への礼儀なんじゃなからうか。(PB32\_00281)

(40) 近衛家の「令息」という形式をとって、興福寺のあとつぎになるのです。こうすることが、当時の上流階級のしきたりでした。(LBnn\_00016)

BCCWJに見られた「～ことがNだ」の用例は、「義務」17例、「礼儀」2例、「しきたり」1例であった。

## 6) 「習慣」類

「習慣」、「日課」、「口癖」、「癖」、「慣例」、「慣わし」、「伝統」、「文化」などがこの類に含まれる。「～のがNだ」の用例は見られるが、「～ことがNだ」の用例は「日課」2例、「癖」2例、「慣例」3例のみである<sup>6</sup>。

(41) その危機感を社員全員に意識させることが、経営者の日課である。(OY01\_02021)

(42) 私は自分に自信がないために、何でも物事を最悪な方向に考えておくことが癖です。(OC10\_01850)

(43) また大宰の帥に新任された人は、必ず本宮に参拝し、神職から杉葉を冠に挿してもらうことが慣例であった。(LBs2\_00083)

「癖」の2例はいずれも「知恵袋」からのものであり、資料の性格が影響している可能性がある。

## 7) 「仕事・役割」類

「仕事」、「役割」、「任務」、「役目」、「使命」、「務め」、「責任」、「職務」などがこの類に含まれる。これらの名詞については「～のがNだ」、「～ことがNだ」のいずれの用例も一定数見られる。

(44) 幅広い範囲で相手に対してチャージをしかけたり、ルーズボールをとることが主な役目だ。(LBn7\_00017)

(45) この束の間の顕現（エピファニー）を細心に記録することが文学の務めである。(LBj1\_00017)

(46) 指揮・命令されたことを可能なかぎり効果的・効率的に実行することがその職務である。(PB13\_00445)

## 8) 「目的・理由」類

「目的」、「目標」、「動機」、「理由」、「原因」、「条件」、「狙い」、「要件」、「前提」、「根拠」、「証拠」、「きっかけ」などがこの類に含まれる。これらの名詞についても「～のがNだ」、「～ことがNだ」のいずれの用例も一定数見られる。

(47) 互助的福祉活動による地域福祉の向上をめざすことが開設の動機である(PB13\_00011)

(48) 失踪時期と死亡推定時期に三か月ものずれがあることがその根拠だった。(PM21\_00584)

(49) 男の子でも、慣れていないほうの腕で投げると、とたんに“弱肩”になることが、その証拠です。(PB14\_00327)



- (50) 吉沢久子さんが最初にこの本と出会ったのは、友達から勧められたことがきっかけだった。(PM21\_00841)

### 9) 「特徴・性質」類

「特徴」、「欠点」、「利点」、「メリット」、「特色」、「難点」、「魅力」、「本能」、「性質」、「習性」、「性分」などがこの類に含まれる。「特徴」、「欠点」、「利点」、「メリット」、「特色」、「難点」、「魅力」は、「～ことがNだ」という用例が一定数見られるのに対して、「本能」、「性質」については「～ことがNだ」の用例は1例ずつのみであった。

- (51) つまり人間も動くことが本能だから、それに基づく行動は決して忘れない。  
(LBe8\_00007)

- (52) ぬかるみの上には、まるでそうすることが彼らの習性であるかのように、疲れた男たちがしゃがみこんでいる。(LB19\_00086)

以上の考察から、「～のがNだ」と「～ことがNだ」について、節を体言化する「の」は節の事態を現場のありさま、動きのままとらえるのに対して、「こと」の方は、一つのまとまった事柄としてとらえるという役割の違いに基づいて、以下のようにまとめることができる。

- 1) 「状況・状態」類、2) 「意見・考え」類は、事態をありのままにとらえたり、発話や思考の内容をそのまま表現したりする必要があるため、「こと」ではなく「の」が用いられる。
- 4) 「やり方」類、6) 「習慣」類は、事態をありのままにとらえて表現するため「こと」よりは「の」が選択される傾向にあるが、「こと」の使用も可能である。
- 3) 「夢・希望」類、5) 「常識・マナー」類、7) 「仕事・役割」類、8) 「目的・理由」類は、内容節をひとつのまとまった事柄としてとらえるか否かによって「の」「こと」の選択がなされる。
- 9) 「特徴・性質」類は、「の」「こと」の選択が可能な名詞と、「こと」が選択されにくい名詞とがある。

## 4. 「～のがNだ」とトイウモノダ文

前節で考察した「～ことがNだ」の文は、「はじめに」でも触れたように、主語と述語を入れ替えてコトダ文にすることが可能である。

- (53) すべてのメディアを対等に論じていることが、この議論の特徴である。(再掲)

- (54) この議論の特徴は、すべてのメディアを対等に論じていることである。

(LBa3\_00036)

これらの文は（倒置）指定文と位置付けることができる。

それに対して「～のがNだ」の文の中に、はコトダ文にできないものがある。前節の1) 「状況・状態」類、2) 「意見・考え」類、4) 「やり方」類、5) 「常識・マナー」類、6) 「習

慣」類に含まれる名詞は、「～のがNだ」は作れるが、コトダ文を作ることは難しい。

丹羽 (2021) はコトダ文とトイウモノダ文を比較して、コトダ文がPの内容として複数の候補が想定される中で当該のQを指定するという述べ方をするのに対して、トイウモノダ文は、Pの内容がどのようなものか具体的に述べるという構文であり、そのため、トイウモノダ文は選択的な文脈があるかどうかに関わりなく成り立つとしている (p.30)。

丹羽 (2021) の指摘は、そのまま内容補充を表す「～のがN」だと「～ことがNだ」の相違としても当てはまる。

コトダ文は、倒置指定文であることから、内容節が一つのまとまった事柄を表しており、したがって主語と述語を倒置した「～ことがNだ」という指定文が成り立つ。それに対して、トイウモノダ文の内容節は、一つのまとまった事柄として表現することはできず、したがって、内容節を主語にした場合には、「こと」による名詞化（「～ことがNだ」という表現）ができず、より具体的な内容を表す「の」による名詞化によって「～のがNだ」という表現が可能になる。

主語となる内容節を名詞化する際に、「こと」も「の」も選択できる述語名詞の場合は、複数の想定される候補の中から当該の事柄を指定するという述べ方が可能であるのに対して、「の」しか選択できない述語名詞の場合には、そのような述べ方ができないということになる。

コトダ文の主語になりにくい名詞として、丹羽 (2021) は、「環境」「状況」「事件」「事例」「トラブル」を挙げている<sup>7</sup>。

- (55) まず、私の環境は、家族ごとにマルチユーザにして、しかもTMPディレクトリを1GBのラムディスク領域にしているというものです。(？こと)
- (56) 往路についても、当時の視認状況は薄暗い時間帯に時速約30キロでバイクで走行し、たまたまそこにいた人物を一瞬目撃したというものだった。(？こと)
- (57) この事件は昭和三十二年、米軍立川飛行場の拡張工事の際、これに反対するデモ隊が、立ち入り禁止の柵を破壊して飛行場内に侵入したために起訴されたというものである。(？こと)
- (58) 報告書の中でも指摘された縁故採用の事例は、独断で知人の歯科医を「科学顧問」に採用したというものだ。(？こと)
- (59) 上記のサイトの他に自分が体験したトラブルは、サイドウィンドウがドアの中に落ちる・エアコンが壊れる、というものでした。(？こと)

ただし、これらの名詞も「最も危険な」「今日の一番の」「最古の」「今の所の」という修飾語句を伴って、他の候補もあり得る中でQを指定する関係が成り立つ場合には、以下の例のようにコトダ文が成り立つとしている。

- (60) 脳障害児の私にとって必要な環境は、まず呼吸を整えることでした。(というものの)
- (61) NBAコーチにとって最も危険な状況は、自分の選手たちから無視されることだ。



(というもの)

(62) やっぱり今日の一番の事件は念願のウミガメを目撃したことです。(というもの)

(63) キリスト教の韓国伝播に関して実際に確認できる最古の事例は、16世紀末、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、イエズス会の宣教師が日本から朝鮮に渡ったことである。

(というもの)

(64) 今の所のトラブルは、階段のパーツがごっそり1階分オーダーミスで届いてないことですかね。(というもの)

丹羽 (2021) は、『内容文』において、コトダ文は指定文と呼ぶにふさわしいが、トイウモノダ文は指定文と言うにはふさわしくない (p.30) と述べている<sup>8</sup>。同じ内容文であってもコトダ文は指定文であり、トイウモノダ文はそうではないということになる。コトダ文が (倒置) 指定文であるなら、当然のことながら、内容文における「～ことがNだ」も指定文ということになるが、主語名詞句が一つのまとまった事柄として表現され (てい) ない「～のがNだ」は、指定文というにはふさわしくないということになる。「～ことがNだ」と「～のがNだ」は、丹羽 (2021) が述べているように「述べ方が異なる」 (p.30) ということになる。

前節で考察の対象とした名詞群が、「というものだ」を述語とすることが可能かどうか、BCCWJを検索 (名詞をキーとして50語以内に「というものだ」が現れる用例を検索) してみると、次のような結果となった。

### 1) 「状況・状態」類

「現実」「実態」に1例ずつ、以下のように「～というものだ」を述語とする例が見られる。「～のがNだ」の用例数に比べると、圧倒的に少ない<sup>9</sup>。

(65) 現実はこれとは正反対に、多くの捕虜が栄養不良や精神的肉体的な拷問から来る病気で死んでいくというものであった。(LBt9\_00011)

(66) しかし、その実態はリットン報告書が指摘したように「政府および公共事務に関しては、たとえ各部署の名義上の長官は満洲在住の支那人なりといえども、主たる政治的および行政的権力は日本人の官吏および顧問の掌中に在り」というものであった。(LBh2\_00032)

### 2) 「意見・考え」類

この類の名詞には「意見」3例、「感想」4例、「本音」2例、「主張」12例、「見解」4例、「持論」1例、「言い分」3例と、いずれも「～というものだ」を述語とする例が見られる。発言、思想的な意味を持つ名詞であるから当然と言えば、当然である。

(67) かれらの主張は、イギリスの領有地はインディアン父祖の地で、ただちに返還すべきだというものであった。(LBs9\_00209)

(68) 私の感想は、月並みですがやはり「コンデション」の大切さを改めて認識させら

れたというものでした。(OY01\_01270)

### 3) 「夢・希望」類

「夢」に2例、以下のように「～というものだ」を述語とする例が見られる。

(69) 彼が描いていた夢は、日本へ行けたら五千万円稼いで帰り、豪華な家を建て、あとは贅沢三昧をして、もう一生働かないつもりだ、というものである。(LBn3\_00028)  
内容が非常に具体的で、モダリティを含んでいる点がコトダ文の用例とは異なっている。

### 4) 「やり方」類

この類の名詞には、「スタイル」2例、「食べ方」1例、「方法」8例、「戦略」4例、「やり方」6例、「流れ」1例と、いずれも「～というものだ」を述語とするよう例が見られる。具体的な内容を説明するものが多い。

(70) 方法は、インスリンやインターフェロンの遺伝子を、大腸菌のなかにいれこんでその産物を大腸菌に作らせるというものです。(LBh4\_00004)

(71) やり方は、直径三十五～四十センチの黒鉛坩堝に粉碎した餅鉄と木炭の粉を入れ、外熱で熱して還元するというものです。(PB47\_00130)

### 5) 「常識・マナー」類

この類の名詞では、「常識」に1例、「原則」に4例、「～というものだ」を述語とするよう例が見られる。

(72) これまでの気候変動に対する常識は、気候変動はほぼ同一時期に、汎世界的に引き起こされるというものである。(LBs2\_00039)

(73) このソフトウェア共有の原則は、「自分の作ったソフトウェアを他人が利用することを許可する」というものでした。(PB30\_00050)

### 6) 「習慣」類

「口癖」1例のみ、以下のように「～というものだ」を述語とする例が見られた<sup>10</sup>。

(74) モスクワ遠征以来、本来の大冒険家に戻っていた彼の口癖は、「生きている兵卒は、死んだ皇帝に勝る」というものであった。(PB42\_00252)

「習慣」類の名詞は、内容節を主語として「～のがNだ」の形式は作れるが、コトダ文は作りやすく、なおかつ「～というものだ」文も作りにくい名詞群ということになる。

### 7) 「仕事・役割」類

「仕事」に2例、「役割」に1例見られるのみである。

(75) 探偵ナイトスクープの、最初の仕事は、あの道頓堀に投げ捨てられた、カーネルサンダースを探すというものでした。(OY04\_08058)

- (76) ファンデーションの役割は、欠点やアラを隠すことではなく、色ムラや凹凸をなめらかにして、その人の持っている肌の個性を生かすというものです。(PB45\_00254)

## 8) 「目的・理由」類

「要件」、「前提」、「根拠」、「証拠」を主語として「～というものだ」を述語とする用例は、BCCWJには見られなかったが、それ以外の名詞については「目的」8例、「目標」4例、「動機」2例、「理由」15例、「原因」4例、「条件」5例、「狙い」2例、「きっかけ」1例、「～というものだ」を述語とする用例が見られた。

- (77) 民主党案の年金制度一元化の目的は、国民すべてが同じように保険料を負担し、同じように年金が受けられるようにするというものである。(LBt3\_00057)

- (78) 輸入が禁止されていた理由は農作物に被害があるからというものだったのですが、(OC12\_06659)

## 9) 「特徴・性質」類

これらの類のでは「特徴」にのみ2例の用例が見られた。

- (80) この仕組みの特徴は環境対策の実施にあたり、各産業がめいめい明確な目標を掲げ、その目標達成に向けて毎年フォローアップを行っていくというものです。(LBn5\_00052)

「～のがNだ」、「～ことがNだ」、コトダ文、トイウモノダ文の用例数の多寡については、述べ方としてどのような表現を選択するかということとも関わってくるため、必ずしも名詞の性質としてどのような制限があるかということを検証するものではないが、上記の用例の確認から以下のようにまとめることができる。

- 1) 「状況・状態」類、2) 「意見・考え」類は、事態をありのままにとらえたり、発話や思考の内容をそのまま表現したりする必要があるため、「～ことがNだ」ではなく「～のがNだ」が用いられるが、「～というものだ」に関しては、1) 「状況・状態」類よりも2) 「意見・考え」類のほうが用いられやすい傾向がある。
- 4) 「やり方」類、6) 「習慣」類は、事態をありのままにとらえて表現するため「こと」よりは「の」が選択される傾向にある点は共通しているが、4) 「やり方」類は、トイウモノダ文が作られやすいのに対して、6) 「習慣」類のトイウモノダ文の用例はほとんどみられない。
- 3) 「夢・希望」類、7) 「仕事・役割」類、8) 「目的・理由」類、9) 「特徴・性質」類については、「こと」が使われやすいもの(「こと」「の」の選択が可能なもので、比較的「こと」が使われやすいもの)は、トイウモノダ文の用例は少ない傾向がある。
- 5) 「常識・マナー」類については、「こと」「の」いずれの表現も可能であるが、トイウモノダ文の用例は限られている。
- 1) 「状況・状態」類、5) 「常識・マナー」類については、トイウモノダ文が作られにく

く、「～のがNだ」が多い。

## 5. まとめと課題

本稿では、以下の点について論じた。

- 内容節を含む名詞述語文「～のがNだ」と「～ことがN」においては、「の」が具体的な動作、状態、出来事としてとらえるのに対して、「こと」は一つのまとまった事柄としてとらえるという、名詞節を作る「の」と「こと」の性質の違いによって説明することが可能である。
- 「～のがNだ」という述べ方しかできない名詞と、「～のがNだ」「～ことがNだ」いずれの述べ方も可能な名詞があるが、前者の場合でも修飾表現を伴うなどの文脈的な条件があれば「～ことがNだ」という述べ方が可能になる。
- コトダ文も、コトダ文の主述を倒置した「～ことがNだ」も、複数の候補が想定される中から該当する事柄を指定するという述べ方をする（倒置）指定文であるのに対して、内容節を一つのまとまった事柄として述べることができない「～のがNだ」は、倒置指定文が作れないという点から指定文とはいえない。
- トイウモノダ文は内容がどのようなものか具体的に述べるという点で「～のがNだ」と共通しているが、両者の述べ方の違いから「～のがNだ」という述べ方が可能である名詞が、必ずしもトイウモノダ文の用例を持つとは限らない。

名詞述語文において、指定文とはならない「～のがNだ」をどのように位置づけるかは、他の特徴的な構文との関連も含めて考察する必要がある。

### 〈注〉

- 1 寺村(1993)は、連体修飾構造を、修飾節中の述語と底の名詞との間に格関係がある否かによって、「内の関係」と「外の関係」に分けた。さらに、内容補足的修飾である「外の関係」を「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分けたうえで、「『ふつうの内容補充』的修飾を成り立たせるためには、底の名詞は、いわば『コト性』を持ったものでなければならない」(p.202)と述べている。
- 2 井島(2012)に従い、以下コトダ文と呼ぶことにする。
- 3 本稿では、西山(2003)に従い、以下のような「BガAダ」という形式の文を「指定文」、「AハBダ」という形式の文を「倒置指定文」とする。
  - 委員長は田中だ(「倒置指定文」)
  - 田中が委員長だ(「指定文」)
- 4 BCCWJからの用例は、( )内にサンプルIDを付した。サンプルIDがないものは筆者の作例である。
- 5 用例の番号は、本稿での通し番号である。
- 6 これらの類のコトダ文の用例は見られなかった。
- 7 用例は、丹羽(2021、p.29)、用例番号は筆者。
- 8 丹羽(2021)は、「この会社の社長は山田氏だ」のように「AハBダ」形式の文を指定文としている。

- 9 「～のがNだ」の用例数は、「現状」527例、「現実」210例、「実情」276例、「実状」55例、「状況」41例、「実態」149例、「事実」51例、「真相」28例である。
- 10 「口癖」を「習慣」類に含めて考察をしているが、発話行為とも関わっているため「意見・考え」類とみなすことも可能である。

#### 参考文献

- 井島正博 (2012) 「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」『日本語学論叢』8号 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 熊本千明 (2006) 「指定文と提示文の特徴」『研究論文集』10巻2号 佐賀大学文化教育学部
- 久野暉 (1973) 『日本語文法研究』大修館書店
- 佐治圭三 (1993) 『『の』の本質－『こと』『もの』との対比から－』『日本語学』12-11 明治書院
- 佐藤雄一 (2023) 『『～のがNだ』におけるコト性名詞の特徴』『共立国際』40号 共立女子大学国際学部
- 高橋雄一 (2008) 「内容節の構造を持つ『ものだ』文について」『東海大学紀要 留学生教育センター』28号 東海大学留学生教育センター
- 高橋雄一 (2010) 「複合辞「ものだ」についての一試論—内容節的な構造を手掛かりに—」『専修国文』87号 専修大学日本語日本文学文化学会
- 杉浦滋子 (2019) 「コト的な内容をもつ名詞の意味変化」『言語と文明』17号 麗澤大学大学院言語教育研究科
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法 (下)』国立国語研究所
- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版
- 西山祐司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- 丹羽哲也 (2021) 「名詞述語文としてのモノダ文とコトダ文」『文学史研究』61号 大阪市立大学国語国文学研究室
- 野田晴美 (1995) 「ノとコト—埋め込み節を作る代表的な形式—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『『は』と『が』』くろしお出版
- 三宅知宏 (2020) 「いわゆる『指定文』をめぐる」『現代日本語研究』12号 大阪大学大学院文学研究科 日本語学講座 現代日本語学研究室

## Copular Sentences “*~ noga N da*” and “*~ kotoga N da*” with Content Clause

Yuichi Sato

In this research note, the following points are discussed based on BCCWJ usage examples.

The difference between “*~ noga N da*” and “*~ kotoga N da*” can be explained by the difference in the properties of the “*no*” and “*koto*” that make the noun clause. While “*no*” takes the situation in the clause as a specific action, state, or event, “*koto*” takes the situation in the clause as one coherent matter.

There are two types of nouns: those that can only be stated “*~ noga N da*,” and those that can be stated both “*~ noga N da*” and “*~ kotoga N da*.” Even in the former case, it becomes possible to use the expression “*~ kotoga N da*” under contextual conditions, such as the presence of modifying expressions.

While both “*N wa ~ kotoda*” and “*~ kotoga N da*” are specificational sentences, “*~ noga N da*” is not specificational sentence because the content clause cannot be stated as one coherent matter.

“*N wa ~ toiumonoda*” and “*~ noga N da*” have in common that they specifically state what the content of the noun is. However, because of the difference in the way they are stated, nouns that are stated as “*~ noga N da*” do not always have examples of “*N wa ~ toiumonoda*”.